

リレーエッセイ

私の大学院生時代

設楽 國廣

私は、一九六七年東京教育大学の大学院修士課程・東洋史専攻に入学した。東京教育大の東洋史には中国史の三講座が完備しており漢、宋、元、明清、現代中国を専門とする教員がいた。農地から前後漢考察した木村正雄、西夏史から宋代の貨幣史を専門とする中島敏はじめ、清朝史の田中正美、元代史の岡本敬二、道教の酒井忠夫、現代中国史の野沢豊などである。院生の数も留年者も含めて三〇人を超えていた。

出身は定員二〇名の文理学部の人文学課程四〇名の史学専攻五名の小規模な千葉大学であった。史学で東洋史を選んだのは三名であり、日本史・西洋史各一名であった。私を含め東洋史の二名が東京教育大の東洋史に進学した。

アジア文化研究会

東京教育大には、私の専門のするトルコ史もしくは西ア

史苑（第六九巻合併号）

ジア史を専門とする教員はいなかった。しかし、当時トルコ史の教員がいた大学は、三橋富治男がいた千葉大だけであった。西アジア史で、アラブの歴史は慶応大学に前島信次、中央大学に島田襄平を知っていたくらいであった。しかし、北・中央アジアのトルコ史に関しては東京大学、京都大学、大阪大学、金沢大学に護雅夫、羽田明、山田信夫、佐口透など多くの研究者がいた。

山田信夫をはじめとして中央・北・西アジアの研究者が、参加者の近況報告を語り合うサロンのな国際アルタイ学研究者の集会（通称ピアク）に影響をうけて、若手アルタイ学研究者集会（通称クリルタイ）を開催した。これは今まで継承され、研究発表が主となってはしまったが今年も野尻湖畔で夏に開かれた。当時学部生であった私に三橋富治男が声をかけてくれたが、参加することなく、後に一〇回目の集会から参加した。

一九六六年の一二月に在京を中心とする西、北・中央アジアいわゆる夷狄を対象とする院生・学部生を中心の研究者の集まりがあり、私は研究室の掲示板に張り出されていた案内のがきを見て、何の予備知識もなく参加した。翌年私が大学院へ進学する東京教育大の学部一、二年生も参加していた。この二人は堀直（甲南大学名誉教授）、梅村坦（中央大学教授）であり、ともにウイグル研究を目指し

ていた。この集まりは、その後、名称がアジア文化研究会となり、現在も世代代わりはしているが細々と夏合宿を白馬で行っている。この集まりは、前述の山田、護らが若手アルタイ学研究者集会として集まったことに反発して、純若手と称して集まったものであったが、山田信夫も顔を出していた。私はこの集会を契機に多くの友人を得ることができ、様々な点で支援を受けてきた。前述の二人や佐藤次高（早稲田大学教授・東大名誉教授）、後藤明（東洋大教授・東大名誉教授）、花田宇秋（明治学院大教授）等であった。当初、アジア文化研究会ではアラブ、イラン、北・中央アジアの研究者は多かつたが、西アジアのトルコ研究は私だけであった。しかし、この研究会に参加することで、大学間を越えた仲間意識から、方法論や史料分析について討論や研究会の発表を通して多くを学んだ。

筑波移転反対闘争

一方入学した東京教育大学は、文・教育・理学部が文京区大塚に、農学部が目黒区駒場に、体育学部が渋谷区幡ヶ谷にあり、いわゆる「タコ足大学」であった。これを解消するため、一九六二年大学が移転を計画したが、地価高騰のため翌年断念した。直後文部省は新都市計画を学長へ提示し、筑波移転問題が生まれた。私の入学前年の一九六六

年から政府主導の筑波移転が本格的に三輪学長によって検討され始めた。私としては、大学の地方移転により東洋文庫などの東洋史研究史料閲覧の機会を失うことにもなり、きわめて不利と考えた。東洋史の文庫の宝庫である東洋文庫に護雅夫がトルコ語文献も多数将来した。これらを利用するため、後述するように大学は、しばしば封鎖されたので、足しげく東洋文庫に通った。

しかしそれ以上に、我々は大学の研究・教育そのものを国家管理の下に置く新大学構想に危険を感じていた。大学の基本は学部自治であり、その中心である教授会が決定権を持ち、学部における研究・教育の責任を持つ基本原則に立って大学は運営されるべきである。これに対して、新大学構想は、文部省が大学理事会制度を創設し、その理事会を管理監督して、大学の運営に直接介入する中央集権的官僚制支配そのものであった。一九七三年「筑波大学法」が国会で成立し、新大学構想による従来にならぬ政府管理の行き届いた大学の設置が行われた。今日、この構想によって誕生した筑波大学の教員の研究・教育の管理、学生の活動制限強化を図る大学管理システムが、大学管理の成功例と考えた文部科学省により、予算配分の細目指示などをもって、独立法人化された国立大学へ導入された。さらに既存の理事会への圧力を強めることによって政府の大学管理が

私立大学へも向けられている。この結果、真の自由な研究教育を行う学部自治による大学運営は破壊され、筑波大の様に政府主導の実学重視の中で、いわゆる政府の意向に沿わない研究は資金面で制限されている。実学重視の大学教育は根本的な人間性を軽視し、科学万能の思想に基づくものである。研究費や補助金の配分を制御することによって、資金を受けたものが、無批判に政府の御用研究機関になつてしまふ危険性を感じなければならない。東京教育大の学長を務めた朝永振一郎は、湯川秀樹とともに核兵器反対の活動を続けていた。このような東京教育大の自由な思想の伝統を打ち碎いて、閉校移転による筑波大は出来上がつていった。それゆえ、ここでなされる研究・教育には多大なる問題が生じている。同様なことが最近では東京都立大学の石原都政による改変に見られる。大学の自由な研究の破壊が進んだ筑波大への不安は、移転問題発生時に、すでに予見されていたのである。この危惧を払拭するため、学生は移転反対運動を展開した。

その後多くの大学で噴出した諸問題から全国の大学での闘争へと発展した。大学闘争の頂点の一つとなった日本大学の不正経理を発端とした闘争は、総長退陣要求受け入れによって決着を迎えたが、時の首相佐藤栄作が一私立大学の問題に介入しこれを覆し、政府による大学への内部干

渉と学生運動弾圧強行が始まった。警察機動隊による抵抗運動の排除にもかかわらず、東京教育大と東大はとともに入試の中止の事態となった。なお、立教大学文学部は、教授会が学生と地道な対応を続け機動隊導入もなく、内示集会の創設などカリキュラムへの学生の要求を汲み取る制度の決定などをもって解決に向かった。東京教育大学は、一九六七年強い反対を主張する文学部の決定を押し切つて、政府に服従して筑波移転を決定した。結局一九七七年三月末文学部の定員は消滅し、多くの心ある教員や学生は大学を去つた。その後東京教育大は廃校となった。

アンカラ留学

大学で先輩にあたる永田雄三、山本真知子の二人は慶応大に進学して、トルコ政府奨学生としてイスタンブルに留学した。大学は筑波移転反対闘争で断続的に封鎖され、研究指導者もいなくなったことから、国内での研究は難しいと判断して、わたしも留学を目指すことにした。大学院に一年在学してから、試験を受けて二年次の九月に急遽留学先に出頭するようにとの連絡を受けた。私は、オスマン近代史の研究には、エンヴェル・ズイヤ・カラル、ムスタファ・アクダア等がいるアンカラ大学言語地理歴史学部が適当と考えた。

大学を休学するために、封鎖中の本部棟から追い出されていた事務局に行つて、未納の授業料を払つて休学手続きをした。東洋史の教室で私のための壮行会をおこなつてくれ、ほぼ関係者全員が参加してくれた。移転賛成反対の教員院生が集まつて、和氣藹々とした集会であつた。聞くところによると、その後、移転賛成反対の両派は互いに同席することは無かつたと伝えられた。

一九六八年九月イスタンブル經由でアンカラに入った。空港から市内まで一面の荒野であつた。後で考えると麦畑の刈り後であつた。下町のウルスの安宿に投宿して、大学に出頭すると、まずは文部省へ行けといわれ、涉外局で立ち往生したが、大使館から銭場書記官が来て無事奨学金受領手続き終了することができた。その後はアンカラに来る留學生の奨学金申請の手伝いは私の仕事となつた。銭場書記官の支援を受けて、どうにか學生寮に入居した。その後大学で登録を済ませ、指導教官のエンヴェル・ズイヤ・カラルに接触でき、助手のムサ・チャドルジが、面倒を見てくれることとなつた。とりあえず、オスマン語の講読と、カラルのオスマン史の講義を受講した。

アンカラ大学言語地理歴史学部

アンカラ大学の開校は一九四六年であつた。それまでは

各学部が独立で存在していた。文学部といえる言語歴史地理学部は、一九三五年の創設である。史学科は創設時に設置されており、一般トルコ史、古代史、中世史、近代史、現代史の各講座があつた。ほかに考古学科やヒッタイト学などの講座もあつた。面識はなかつたが、私の留学以前に東大の考古学の丸田さんがヒッタイト学科に留学したことがあつたらしいが、帰国後亡くなられたとのことである。

トルコ共和国成立時から言語および歴史研究は、国民国家成立のためにトルコ人を創設する目的を持った国家事業であり、トルコ語の制定および国民史の確定が大統領ムスタファ・ケマルから要請されていた。このためにも言語歴史地理学部がアンカラに建てられたのである。さらに歴史研究の拠点としてトルコ歴史協会、言語研究の拠点としてトルコ言語協会がムスタファ・ケマル個人の基金によつて成立した。トルコ歴史協会は言語協会とその後に来たアタチュルク文化センターとともに、一九八三年に憲法の規定により国家機関のアタチュルク文化・言語・歴史高等研究機関となつたが、それまでは独立した特別公益機関であつた。トルコ歴史協会は、一九六〇年代に現在の所在地に立派な図書館と高度の印刷技術を持つ出版所を完備した建物に移転した。それまでは隣接する言語歴史地理学部の間借りしていた。留学中はほとんどこの界限ですごしたため、

歴史協会の図書館を大いに利用した。

大学では助手研究室に、後に教授となりすでに多くが定年退官した若手の助手が机を並べていた。この部屋に出入りして研究の支援を受けた。そのメンバーは、一般トルコ史のヤウズ・エルジャン、後にガージ大学の学長やアタチュルク文化言語歴史高等研究機関の長官になったレッシヤト・ゲンチ、現在ビルケント大にいるオスマン史のオゼル・エルゲンチ、中国史のアイシエ・オナト、学部長となったメリツキ・デリバシユなどがあげられる。また中央アジア史教授のバハッティン・オゲル、インド学教授のアビディン・イテイルや中国学教授のホータン出身のベキンなどのお世話にもなった。

私の研究課題である「統一と進歩委員会」は、オスマン朝末期に秘密結社として創設されたことから、史料は偏在していた。公的史料が最も多いと考えられるユルドウズ宮殿に保管されたオスマン公文書館の史料は、一九九〇年代以降からカタログがつくられて、やっと利用が可能になり、現在は文書館での作業を行えるが、当時は利用さえできなかった。このため、統一と進歩委員会メンバーの回顧録が主要な史料になるが、統一と進歩委員会本部は公式記録を、本部で作成するとの計画から、メンバーの個人的な出版を禁じ、手持ちの史料を全てサロニカの本部に提出すること

史苑（第六九卷合併号）

を命じた。そして、バルカン戦争でサロニカはギリシアの手に落ち、本部はイスタンブルに移動したが、本部の文書等の処置については不明である。サロニカに残されているのではないかと考えるが、いまだ情報は得られていない。このため、一九〇八年の武装蜂起を行ったニヤーズィ・ベイの一九〇九年に出版された回顧録を除いて、回顧録はほとんど出版されていなかった。しかし、本部の意向にもかかわらず、資料の保管を続けたメンバーもあり、第二次世界大戦後に回顧録等の出版がなされるようになった。これらの回顧録を読むために、図書館等に通った。また古本屋などで現物が入手できる場合は、これを少ない奨学金を割いて購入した。当時行きつけの古本屋は間口奥行き三mほどの店であったが、次第に店を広げ、今ではアンカラの中心にビルを立て、出版も行う本屋になっている。

戒厳令

しかし、一九七〇年にかけて社会不安が増大し、大々も様々な勢力の争いの場となり、混乱を極めてきた。一九六〇年に師のエンヴェル・ズイヤ・カラルが憲法起草委員長となって制定された憲法により、大学は放送局とともに立法、司法、行政と並んで独立した権力を持っていた。行政府の警察は大学へ立ち入ることはできなかった。この

私の大学院生時代（設樂）

ため、大学が独自の警察を持っていないことを利用して、各勢力は大学を拠点として対立抗争を重ねていた。

一九六九年以降社会不安はますます深まり、軍の最後通牒が出て事実上のクーデターが行われ、スレイマン・デミレル首相（後大統領）は辞任し、ニハット・エリムが首相となった。軍は主要地方に戒厳令を布告し、アンカラも戒厳軍司令部の管理に置かれた。軍が実権を握り、大学にも出動して、講義中の教室に完全武装の兵士が入り込んで検索を行うことも始まった。また、外出禁止令の出ている真夜中に全戸の戒厳軍の家宅搜索が行われることもあり、私の宿泊していた学生寮も例外ではなかった。このため落ち着いて大学で研究することは難しくなり、歴史協会の図書館や国民図書館に通うことが多くなった。

トルコ政府の奨学金は年度あたり八ヶ月間しか出ないのであるが、それを三年延長して滞在した。奨学金の額も少なく本を買うには不十分であったが、できるだけ本を購入した。時々、アルバイトをしたがそれも多くなく、食べることにも不自由し体調はよくなかった。結局、これ以上滞在はできないと判断し、奨学金の延長をあきらめ帰国することにした。

大学は休学してきたので二年間で満期となり退学していた。帰国後仕方がないので、まだ知り合いの教員がいた東

京教育大大学院に再入学し、修士論文を提出して一九七三年三月、東京教育大大学院を修了した。

（本学文学部教授）